

「気候博士になれるかな！」

— 一番を探そう —

宮津市立宮津小学校 村上 誠

はじめに

日本の気候は、四季の変化に富んでいる。どこでも春夏秋冬がある。しかし、同じ冬なのに、沖縄は半袖のシャツで過ごし、北海道では体育の授業でスキーをしている。どうして、こんなに気候が違うのか、ということを知るには、地図帳の「気候」のページを活用するとよい。この資料図は立体的に表現され、児童が感覚的にわかるように、気候の特色ある地域を取り上げている。今回は、この統計資料を使った活用法を考えてみたい。

気温のようす、降水のようすから「一番を探そう」

5年生の社会科授業では、開口一番「日本で一番よく雨の降るところはどこ？」とたずねることにしている。



これは、児童に驚きと学習への意欲づけをねらうからである。さらに「一番雨の降らないところは？」「一番気温の高かったところは？一番低かったところは？」「一番雪が降ったところは？一番降らないところは？」といったように、特色のあるところをたずねていく。これは、地図帳に目を向けさせ、その活用の仕方を理解させるためである。

特に、ここでは、次のようなことに気づかせたり考えさせたりしたい。①台風の通り道を思い出させる。②季節風に目を向けさせる。③雪がたく

さん降る理由や雨がたくさん降る理由を地図帳の統計資料から予想する。つまり、たえず地図帳を手元において、それを活用する学習習慣を身につけることをねらっている。



(帝国書院『小学校社会科地図帳(三訂版)』p.54)

終わりに

この学習では、「尾鷲」とか「網走」といった雨のよく降る地域やその逆の地域の地名を覚えるのが目的ではない。しかし、こうして覚えた地名は、一度覚えると、その特色とともにまず忘れない。気候への興味・関心をわきたたせておいて、日本海側は積雪が多く太平洋側は少ないとか、北海道や東北地方は西日本より雨量が少ない、といった特色に気づき、「なぜ？」という課題をみつけ、地図帳を活用することによって、その理由を考察できるようになってほしいと願っている。